

文語日誌 平成二十五年十二月

四月、茨城に越し來たり。時間に餘裕の出來たれば、幼き頃手遊びたる洋琴を習はむと思ひたれど、安普請の借家なれば洋琴を置くべくもあらず。しからは他の樂器なりともと此方彼方を探し迷ひ、一日、目に留りたるは尺八なりき。如何なる縁にか、尺八を習ひ始めぬ。我ながら思ひもよらぬことなりけり。

古言に云ふ。尺八は佛道修行の法器とて紀元前二世紀頃インドにて生れ、尺八にあらずば御釋迦様の妙なる聲をよく表すことなしとて大いに榮ゆ。後に中國を経て日本に渡り、普化宗とともに廣まりたりと。普化宗、今となりては御寺のひとつもなく、ただ尺八を残すのみ。謂れを聞けばいよいよ興まされり。

されど、修行の法器たるもむべなるかな、かくも難しきものとはゆめにも思はざりき。第一、音出でぬなり。來る日も來る日も、大きく吸ひたる息を惜しみなく尺八に吹込めど、一向に鳴らず。吹口の狭きリコーダーと異なりて、尺八は竹の管を斜めにそぎ取りたるのみなれば、息漏れせぬやうのあてやうに氣を附けつつ、更に息の強さ、方向、唇の形にも心遣ひす。とりわけ我は不器用なれば、漸く音の鳴りしは尺八を手にしてひと月ばかりも經ちし頃なりき。

第二に、構造餘に單純なり。出すべき音は西洋音階にて十二あれど、尺八の孔は五つのみなれば、五つの基礎音より他の七つの音を派生せしむ。孔に指を軽くかざし、顎を引くなり。かゝる方法たるや、微妙にして究め難き。單音すら容易に吹くこと能はず、況して曲の中にて吹くはなほ難し。

基礎音ならば簡單かと思ひきや、一オクターブ高き音を出だすことまた難し。高き音、尺八の中の振動を二倍にせんがため、唇を緊張せさせ強く吹く。教へらるゝ通り吹けど、高くならず。或いはあるべうもなき時に高き音出づ。制御し難き樂器なり。

されどと言はんかしからばと言はんか、難き樂器は良きものなり。音出しの容易なるリコーダーにては均一の音のほか出でず。尺八は音出しの難ければこそ、ゆらぐが如く、かするゝが如き、幽玄の音色の出づるなるらめ。また、派生音のあればこそ、經過音もまたあり。これ、リコーダーの出だすこと能はざる音なり。難きことは奥深きことと思ひ至る。

さて、師曰く、尺八は氣の鍛錬、息に氣を込めば自ら音色に表ると。我が尺八の音の今一つ凜然とせぬは我がぐうたら心の心根を表すか。先づは心を入れ替へ、廣くゆたかなる心を持つべしとぞ思ふなる。